

Selected Students' Works

from Studio Course 2005

スタジオコース STUDIO COURSE

学部の4年生は毎年「スタジオコース」と呼ばれる設計演習課題に取り組むことになる。

'studio course'.

それぞれの担当教官が独自のテーマを設定し、学生はそのテーマに応じて、Each professor sets up his original subject, and students select freely 自らの望むコースを所属する研究室に関係なく自由に選択するといった、い regardless of their laboratory.

わは卒業設計の前哨戦だ。

These studios, so called, are 'the preliminary skirmish' of diploma projects.

その様々な作品の中から、4コース7名の作品をここに紹介する。

We will introduce 7 works among the various courses.

Maki ONISHI
Yoshinobu SHIMOYAMA

TAKEYAMA STUDIO
"POESY × ARCHITECTURE"

Taku NISHIKAWA

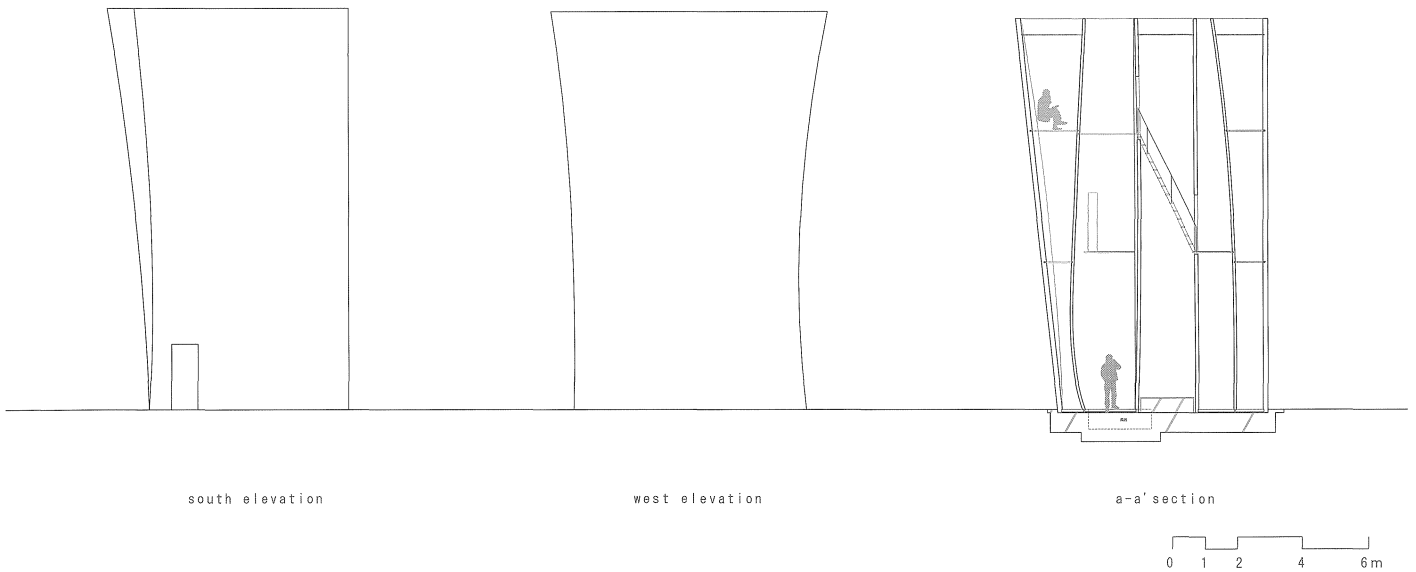
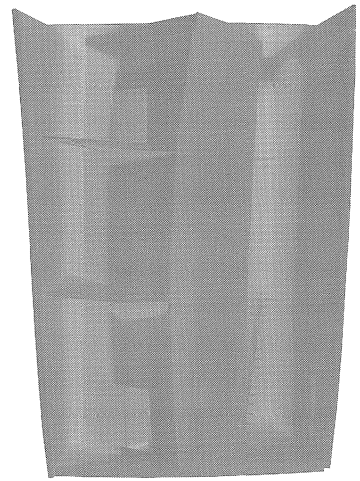
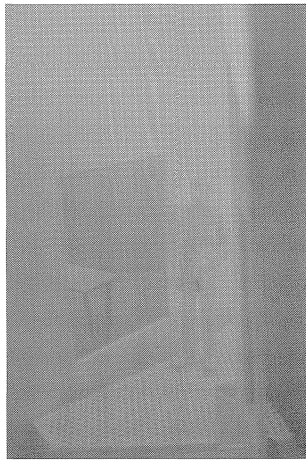
TAKAMATSU STUDIO
"SILENCE AND VERBOSITY"

Junichi SAGA
Kensuke HOTTA

MUNEMOTO STUDIO
"SCENARY AND ARCHITECTURE IN TIME"

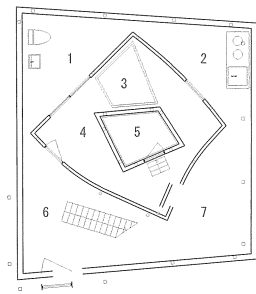
Takuya OTA
Yûki HYAKUDA

MON-NAI STUDIO
"CITY AND ARCHITECTURE"



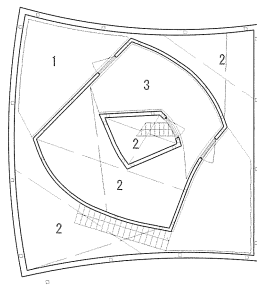
気配のある家

一人の男性のための家。
一人で住んでいるのだけれど、何かの気配に満ちている家。三枚の壁とその向こうで踊っている影と、光。壁は白。陶器のような冷たさ。井戸の底から空を眺めるような、ぼんやりとした光。



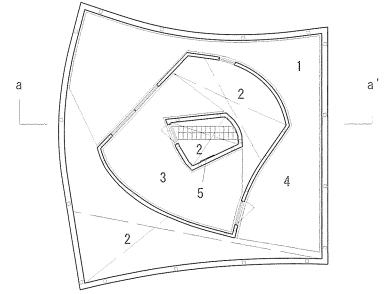
1. 脱衣所・トイレ 2. キッチン 3. 風呂
4. 庭 5. はなれ 6. エントランスホール
7. リビング・ダイニング

plan 1F 1/200



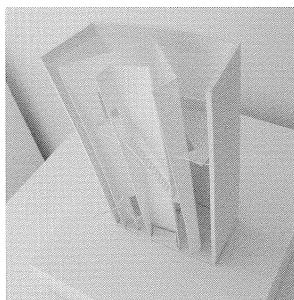
1. 寝室 2. 吹抜 3. 廊下

plan 2F 1/200



1. ライブラリ 2. 吹抜 3. 廊下 4. アトリエ
5. デューラー銅版画

plan 3F 1/200

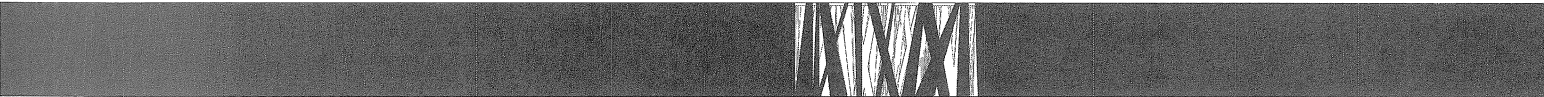




NORTH ELEVATION 1/100



SOUTH ELEVATION 1/100



EAST ELEVATION 1/100



WEST ELEVATION 1/100

6:00 p.m. 毎日、日の入りとともに彼はこの世に生まれおちる

彼は少し人と異なっていた

「自閉症」

人と交わるのが苦手だった

独りを好んだ

毎日の些微な行動の変化が苦痛だった

毎日のルーティーンがこころを変えた

太陽が暑いだった

太陽は彼には明るすぎた

寝ることを拒絶した

目を閉じると不安でたまらなかった

彼には野折、訪問者があった

春には寒

梅雨には雨音

秋には落ち葉

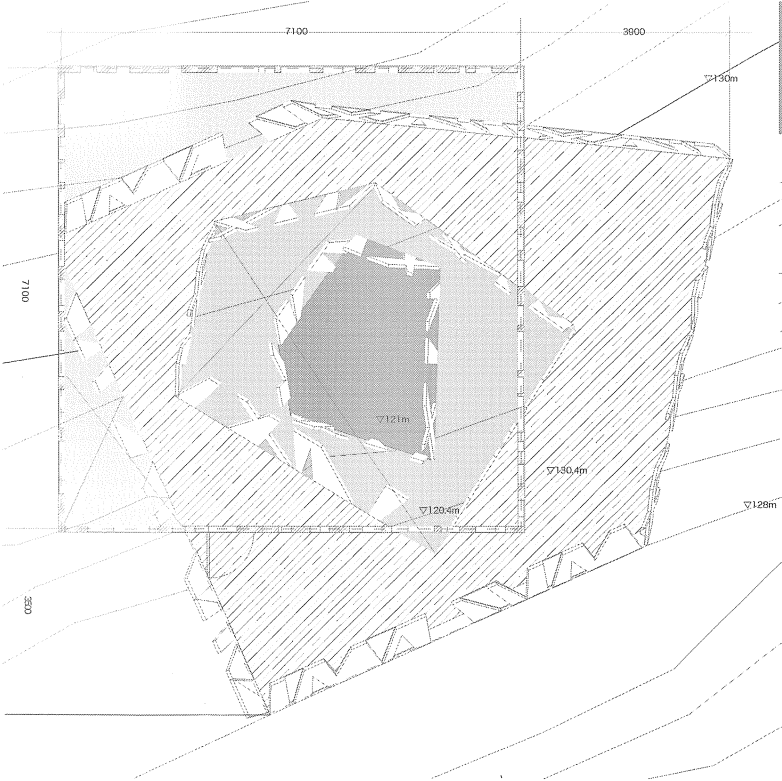
冬には雪が

中でも早い春の嵐の木を寵愛した

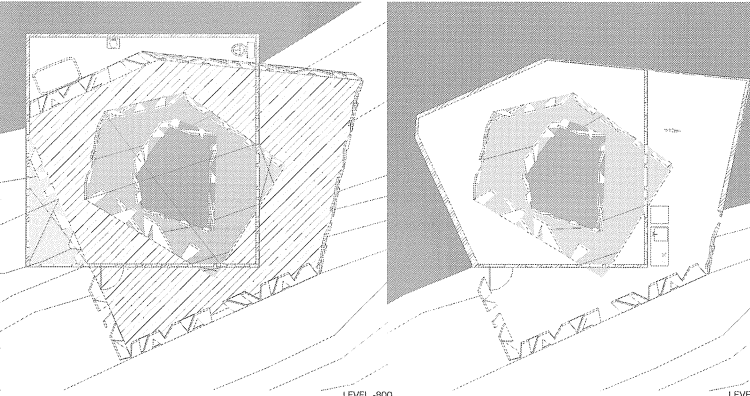
寝ることと隣りは彼にとって等しい

彼の人生は夜、花開き、日の出とともにまた闇へと戻る

夜咲く雪の家



PLAN 1/50



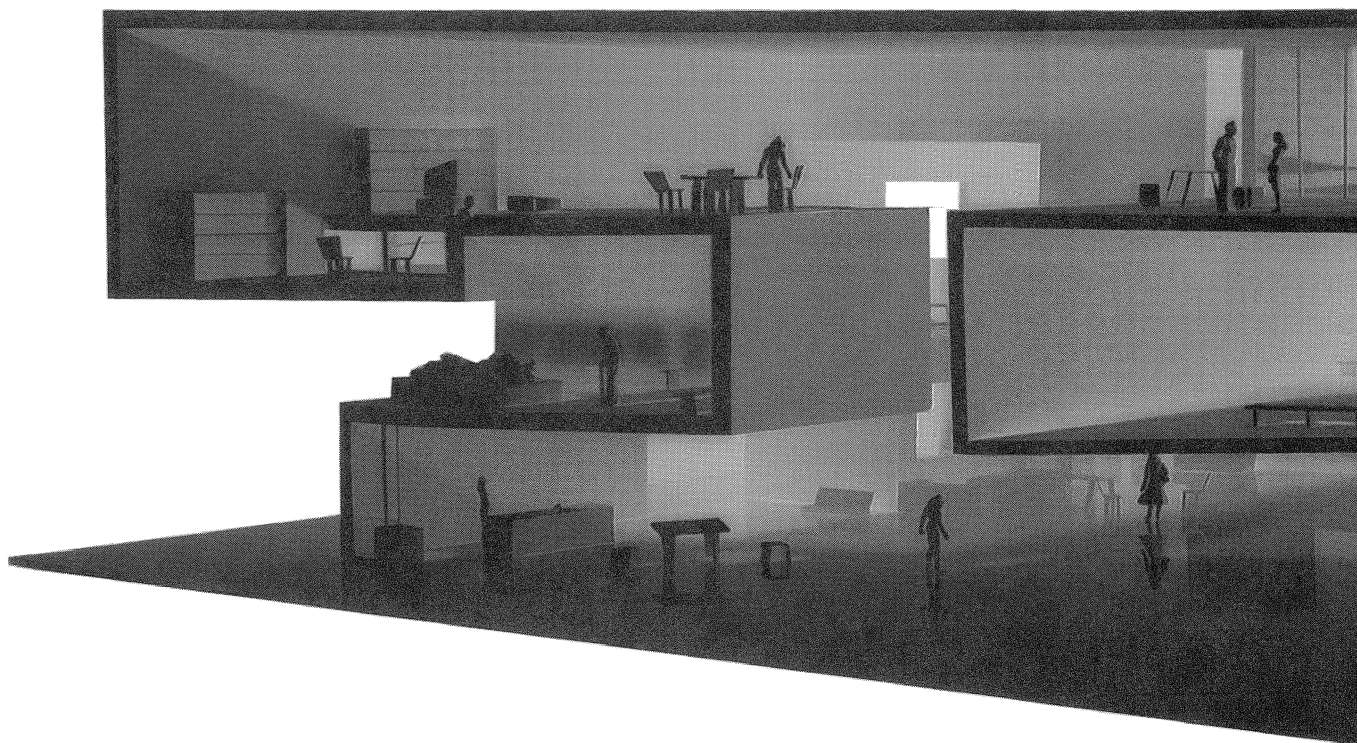
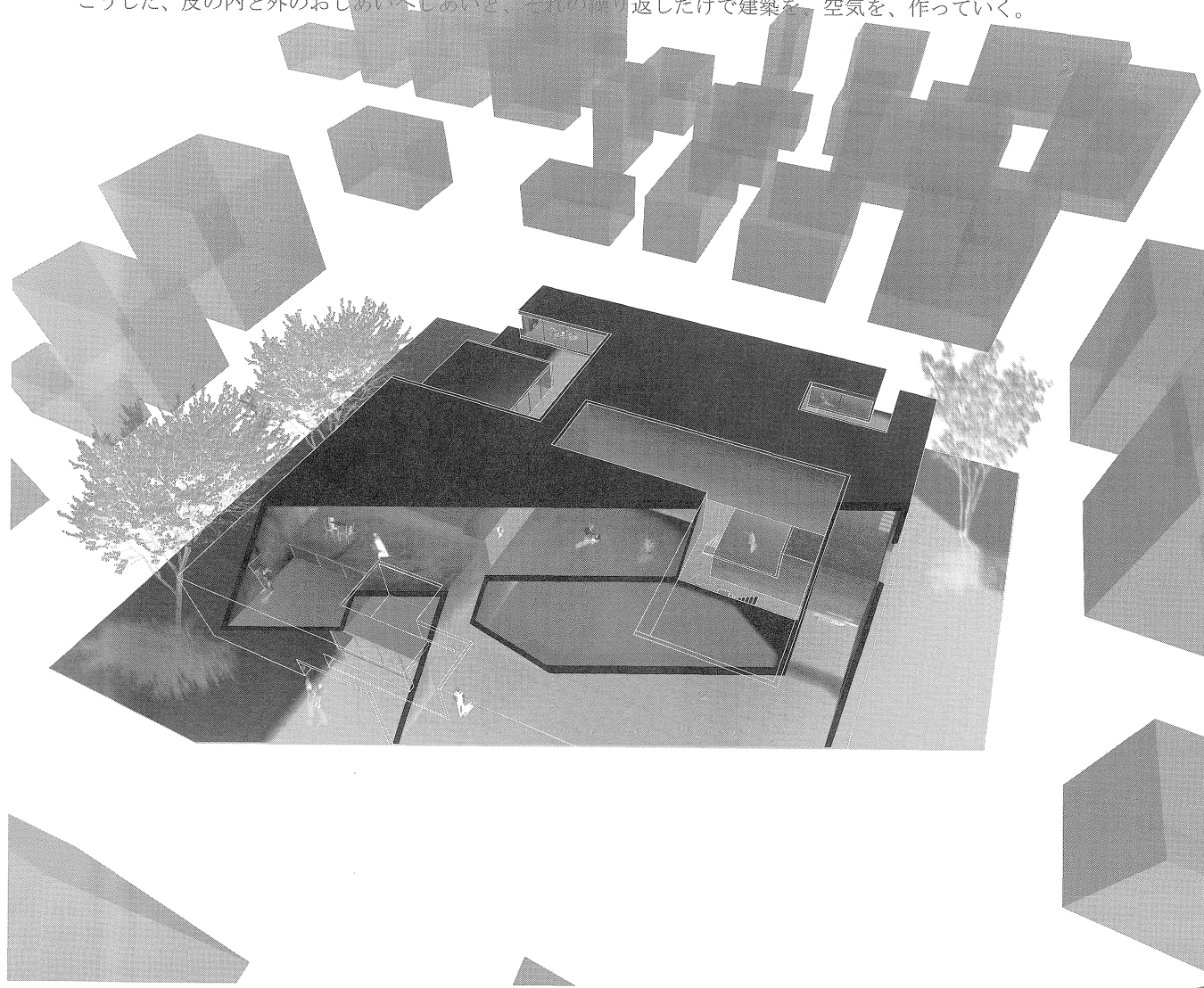
SECTION

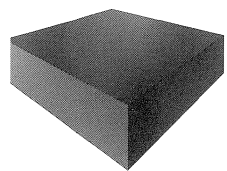


空気の凹凸

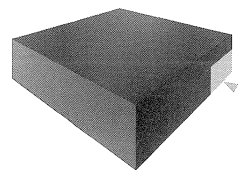
建築の質とは、壁や柱、床などを取り除いていった最後の残余物、空気の質そのものだと思う。
ひとつつながりの空気の中である場所とある場所が近づいたり離れたり、広がったり狭まったりするような建築を
シンプル（沈黙）なルールによる操作だけを用い、それをオーバードライブ（饒舌）させることで実現させることを考えた。

建築のヴォリュームを規定する一枚の「皮」を想定し、それをへこますことがここでいうルールである。
すると内側に、気持ちの良い風が起こって、たえず建築の内側を空気が巡っていくような緩やかにつながった空間が出来た。
こうした、皮の内と外のおしあいへしあいと、その繰り返しだけで建築を、空気を、作っていく。

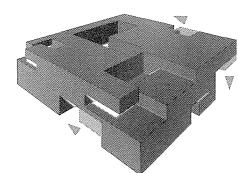
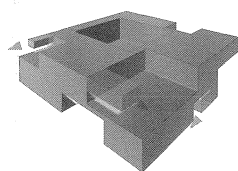
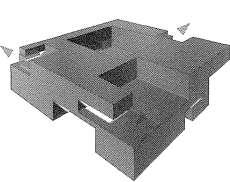
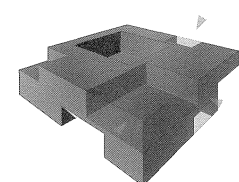
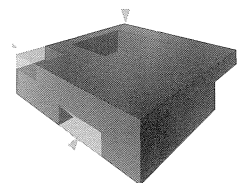




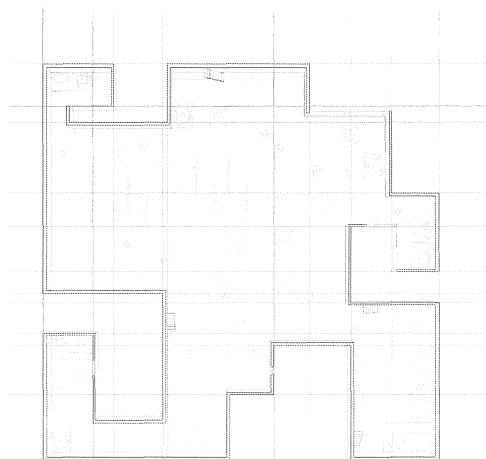
ひとかたまりの空気



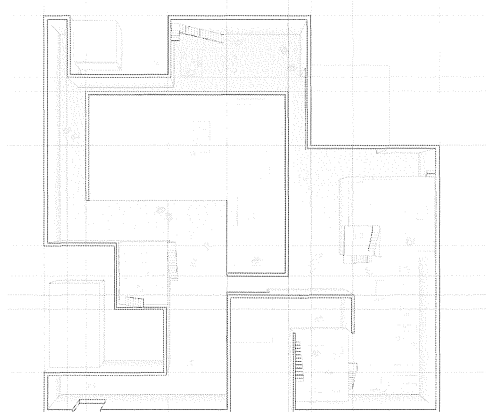
ヴォリュームをへこますという操作を
幾度も繰り返す。



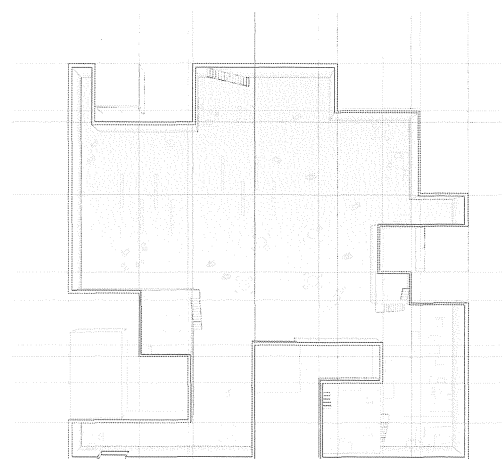
そうすることで、内
と外を仕切る皮層が複雑に入り組む。
皮一枚はさんで様々な領域がたがいに
押し合いへし合いし出す。



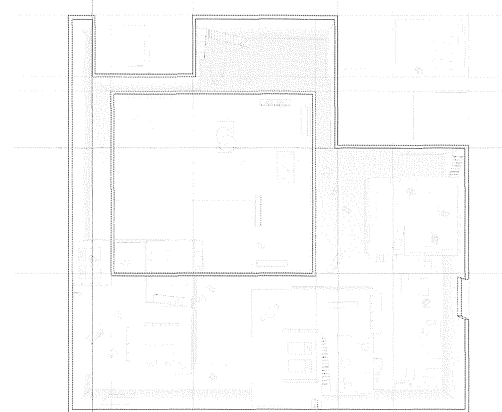
+1,500



+4,500

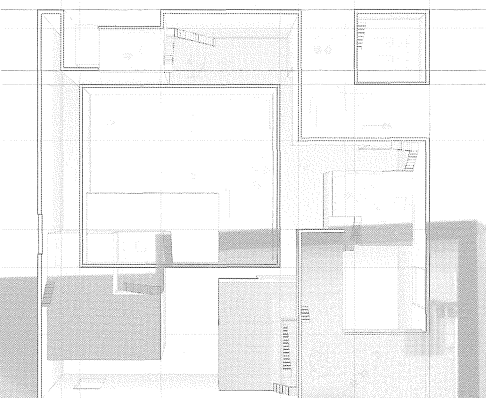


+3,000

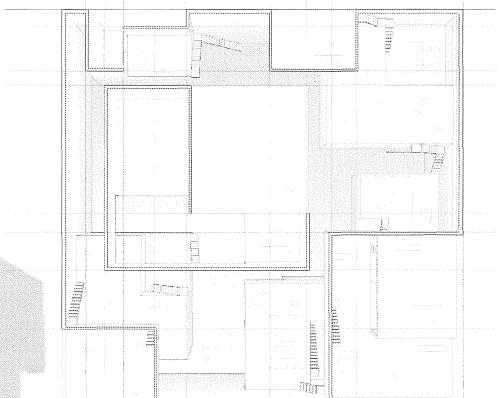


+6,000

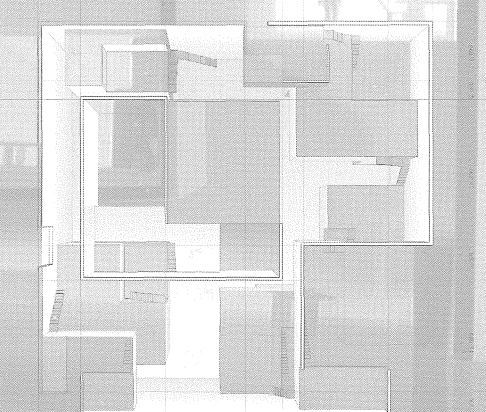
一枚の皮の挙動だけで出来上がる建築。
この建築をどの平面で切っても一筆書き状の断面が表れてくる



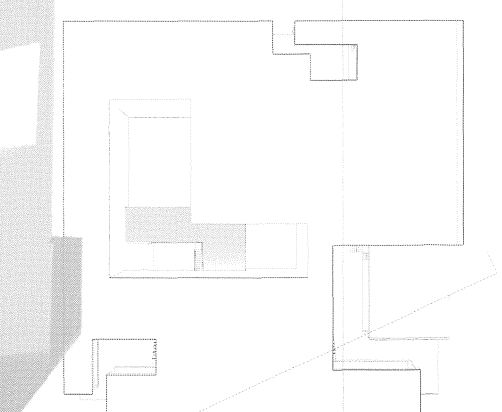
+7,500



+9,000



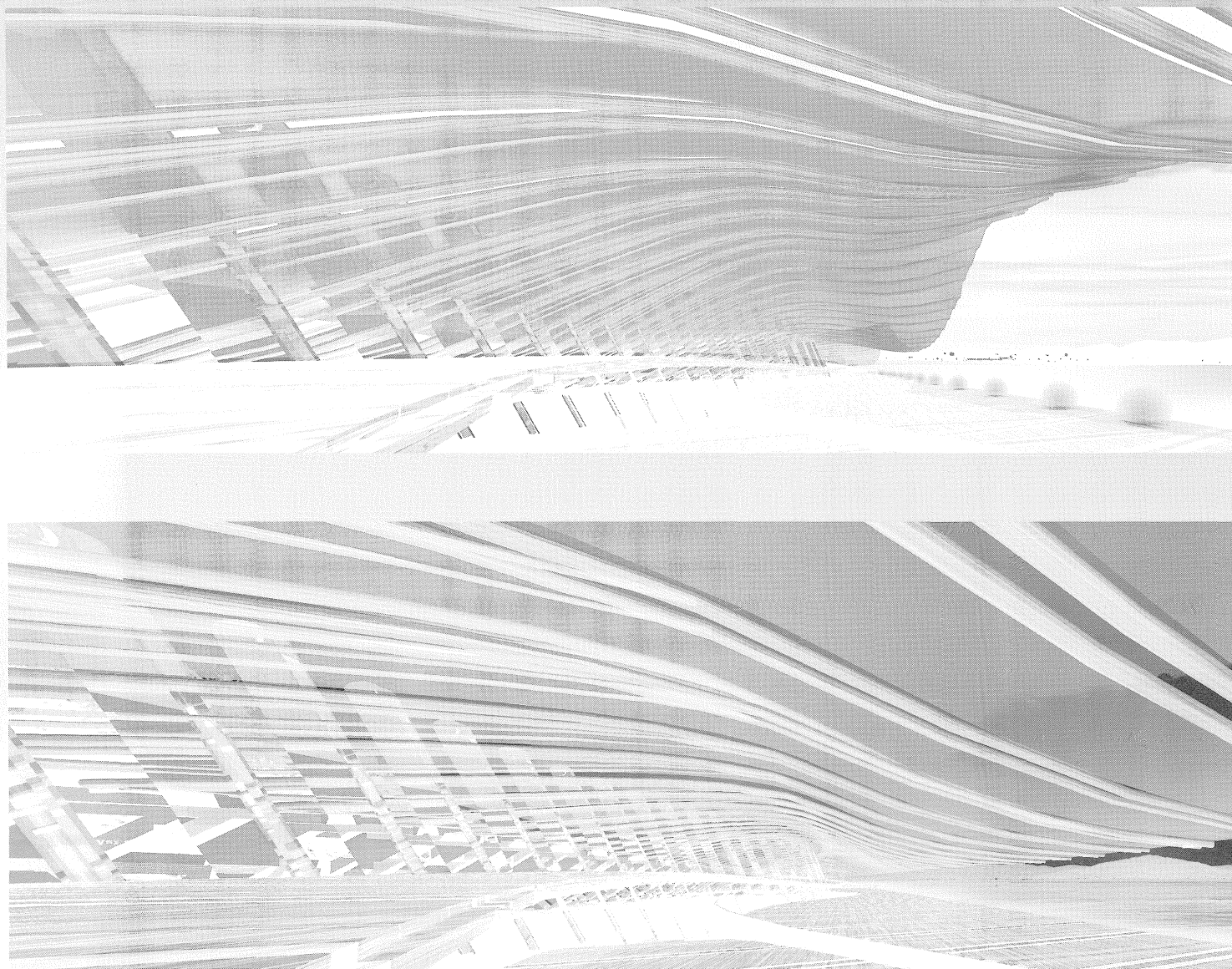
+10,500



+12,000

plan 1/800





欠伸建築

愛知県蒲郡市は、三河湾に臨んで開けた風光明媚の土地である。
白砂青松の海岸線、沖合には緑の小島 ― 竹島がぼっかりと浮かぶ。
市内各所に湧く温泉、竹島弁財天への参拝客、丘の上にはレトロなホテル ― 景勝地として通ったこの地の景観も、戦後の沿岸開発により様変わりした。
砂浜や塩田は埋め立てられ、海岸線はコンクリートの護岸で固められた。
かつて参拝客は船で渡り、巳年の大祭のときにのみ仮設の木製橋が架けられたという竹島へは、コンクリートの剛直な橋が一直線に伸びる。
柔らかに時間と応答し合ってきた風景は、今や硬直化しつつある。

硬直化し、褪色していく風景のなかに、時間を呼吸する建築を挿入する。
度重なる開発により戦後急速に構造付けられていった風景を、絶えず変化しながら立ち現れるひとつひとつの情景へと還元すること。

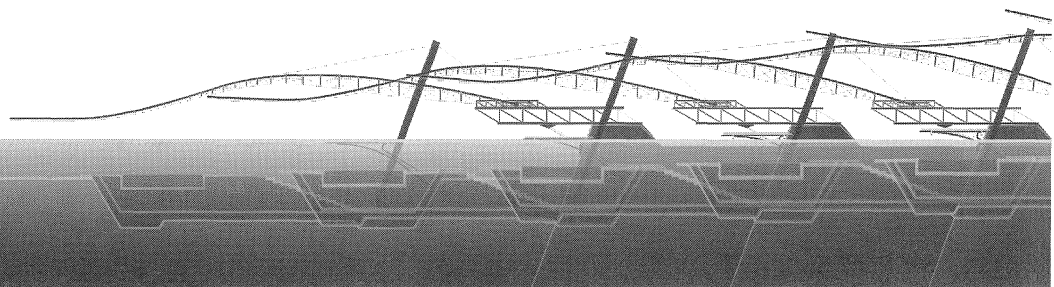
具体的には、潮の干満に応じて開く / 閉じる建築を計画する。

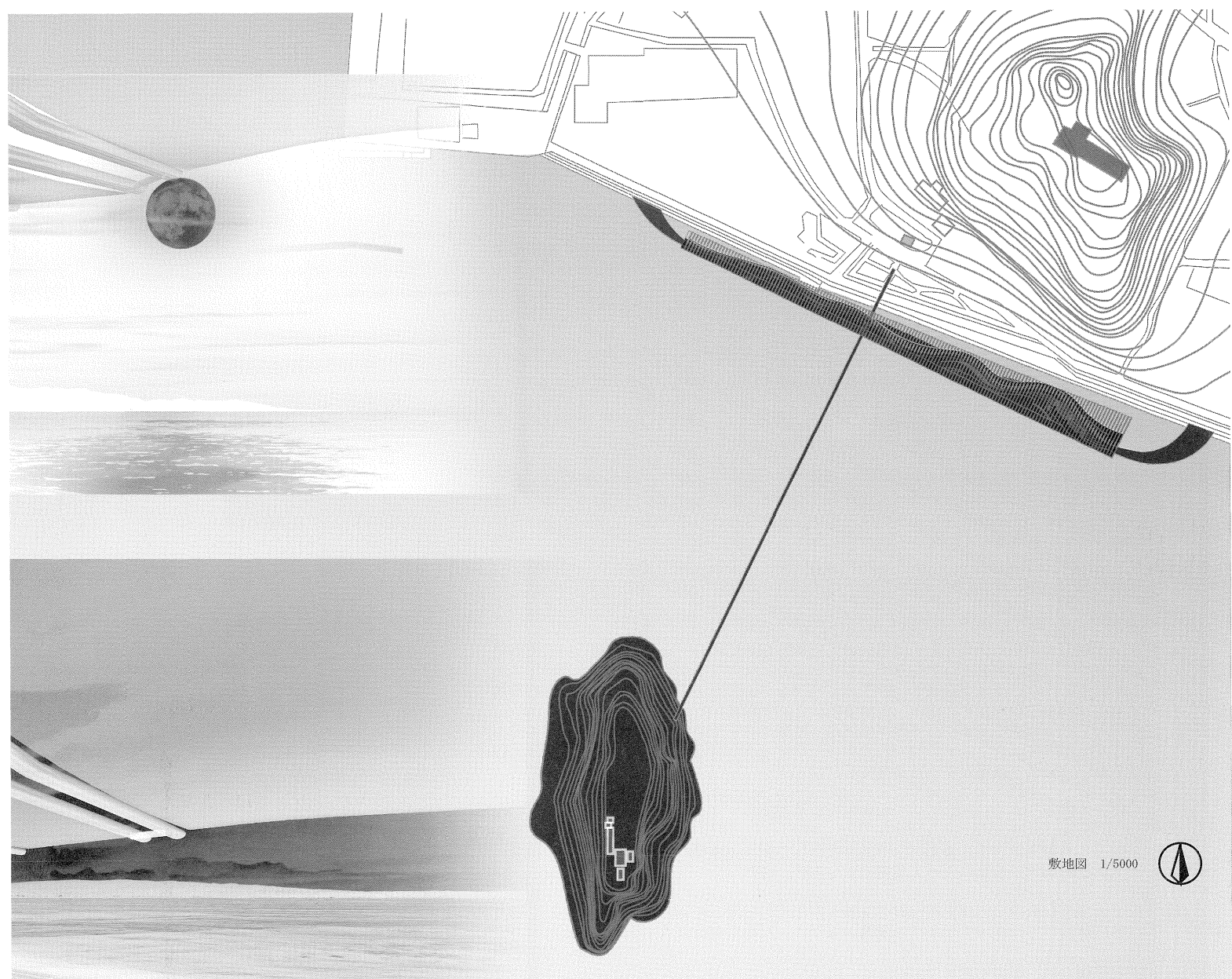
海面に浮かぶ長大な浮体構造は、水位の変化に応じて上昇・下降を繰り返す。
蛇行しながら連続するマストに支えられた屋根構造は、その一端を岸壁に固定され、浮体構造の漂流を防ぐ。
満ち潮によって建築が上昇すれば、構造体が跳ね上げられ、膜屋根は欠伸をするかのように膨張し、引き潮とともに収縮する。

空間の膨張・収縮とともに、風景の見え方も多様に変化する。
光も、風も、波の音も、絶えず連続的に変化し、その時間、その時間において二度と現象することのない情景を創り出す。

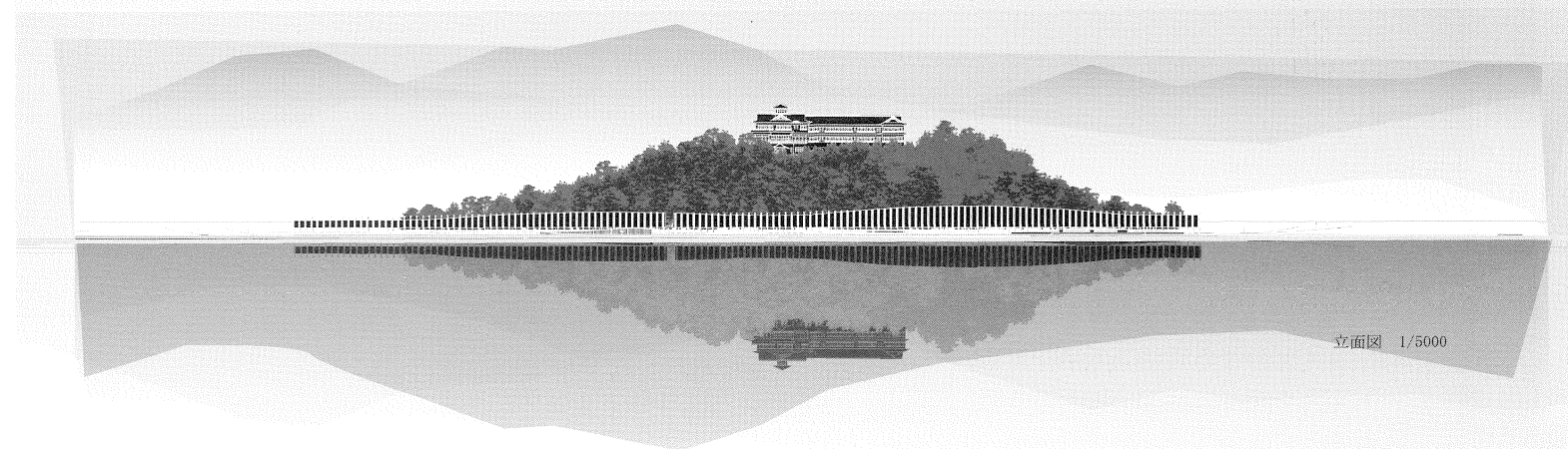
潮位 +2600

+0

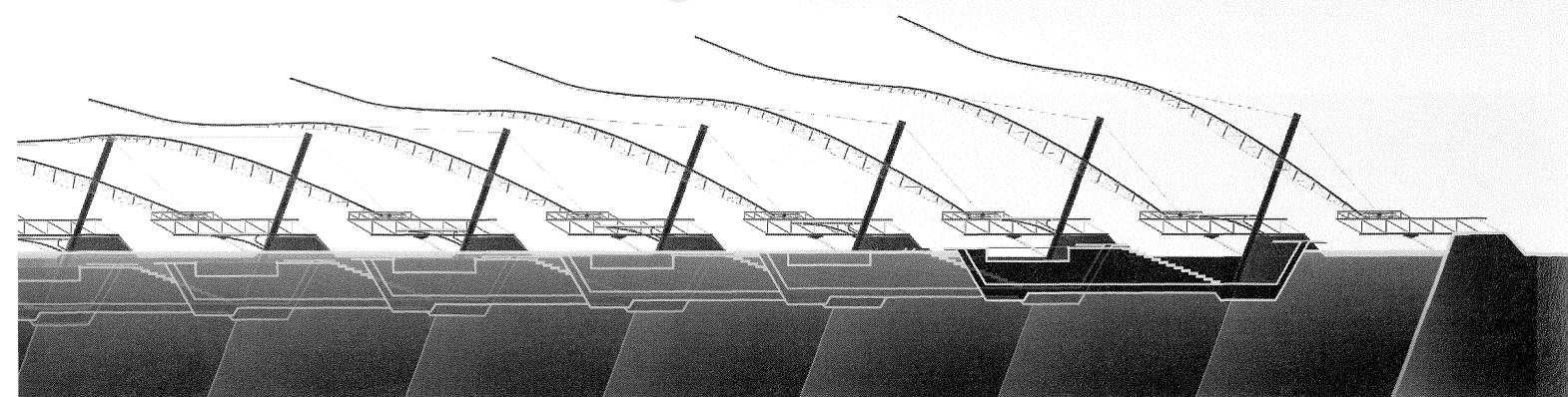




敷地图 1/5000



立面图 1/5000



NAMEKUJI KENTIKU

1、逃げていく湖。チャド湖。

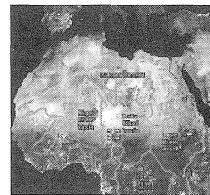
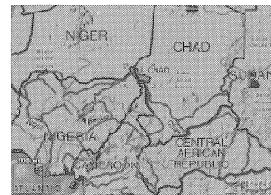
サハラ砂漠の南、チャド湖が危ない。湖の水位が浅く、平坦なため湖岸船が変化し易い。

チャド湖に接するチャド、ニジェールナイジェリア、カメルーンの四カ国はいずれもこの湖の豊富な水を狙っていた。チャド湖を制するものが近隣を制すといわれ、互いに覇を争った。ナイジェリアでは「南チャド開発計画」ひとつだけでも一兆円近い開発費を投じたが、その灌漑設備は未利用のまま放置されている。ほかの国の開発プロジェクトも成功した例を見ない。

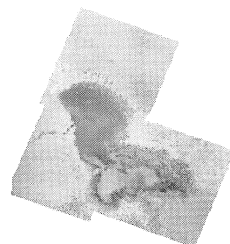
1973年、水をたたえた青いチャド湖は日本の四国と同じくらいの大きな湖だった。

9年後の1982年。湖の北半分は赤茶色に変わってしまった。水が干上がり、植物が生えていることを示している。

1984年。ほとんどの沼地が消失し、チャド湖は10年あまりの間に十分の一になってしまった。この二、三年で湖岸線はバガ村から80キロメートルも後退したという。場所によっては、一年に50キロメートルもの速さで南に拡大するサハラ砂漠に、チャド湖は確実に飲み込まれようとしている。



Lake Chad 1968



Lake Chad 1973

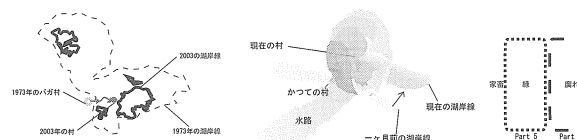
2、逃げる湖。取り残される村、追走する村

チャド湖の湖岸線の変化とともに漁村の人々も移住している。ただし、厳しい自然状態のなかで、漁村は漁村として生きてゆくほかなく、仕方なしに移動しているといってもよいかもしれない。魚が取れないと生きて行けないのである。現在の村は劣悪な住環境である。砂地に杭を立ててテントを張るだけという簡素なものである。そこで、バガ村をモデルにして湖岸線に沿って動く村を建築化する。ただ、建築は作ってしまうと邪魔になる。その砂漠の民のノマディックな生活を邪魔するものであってはならない。動きを阻害せずに建築を作るには、

- ・移動できる、あるいはいくらかでも作り足せる建築
- ・細積工法あるいはセルフビルド
- ・作っても解体が容易、あるいはそのままにしておける建築
- ・放置しても腐食
- ・又、その遺物が周りにとって負担にならない仕掛け
- ・風化、腐食

以上のような条件から生分解性プラスチックを使用した、組積構造を提案する。ここでは生分解性プラスチックでできた容器のなかに、土壌改善の効果も期待できるピートを砂と混ぜ合わせて封入する。これによって、構造材としては圧縮に強くなる。しかも一定期間後には、その外壁だけが朽ちて、何もなかったかのごとく建築が消滅するのである。それどころか、土壌改善の働きがうまく運んだとすると、その軌跡には緑が繁殖し、家畜を養うことが可能になり、さらにうまく運べば、農耕も可能かも知れない。物事はそのようにすべて順調に進むとは限らないが、少なくとも、環境に対して負荷にはならない。

- Part 1 建設部分。村人が村のブランドで作ったブロックを、セルで組み立てていっている。その間にも湖岸線は後退して行ので、仕事は尽きない。
- Part 2 港部分。主要産業である漁業の港及び売場が行われているに付随して、様々な商業が行われている。又同時にブランドが移動している。
- Part 3 街区部分。人々が思い思いの場所を陣取って、シェルター計画としては形を提案しているが、実際は、そのデザインどその村に託すべきだともわれる。
- Part 4 腐食部分。腐らせる為に屋根を除く。紫外線がその材質の進める。ただし周辺の防砂壁だけは最後まで残る。この場合防砂材がその機能を発揮できるまでの発育期間として、一緑化部分。ビートによって改良された土壌はいきなりは密にならないだろうが、乾燥に強い低木程度は持続可能な状態にもろろん灌漑は必要ではあるが、ビートによってその保水に上がっているの、その量は少なくてもすむとおもわれる

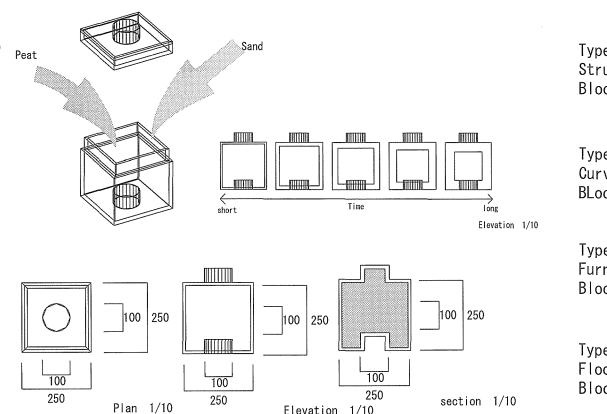


3、腐るプラスチックで漁村を建築化

生分解性プラスチックで作ったブロックに砂とピートを封入する。これがすべての部材を構成する。生分解性プラスチックとは微生物などの酵素によって分解され、最終的には二酸化炭素と水に分解されるプラスチックのことである。ピートとは泥炭のことである。植物が水面下で緩慢な分解過程をたどり生成されたといわれている。熱帯地方にもかなりの量が埋蔵されていることが明らかになってきた。

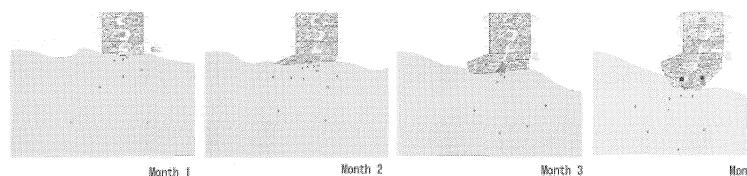
ピートの性質

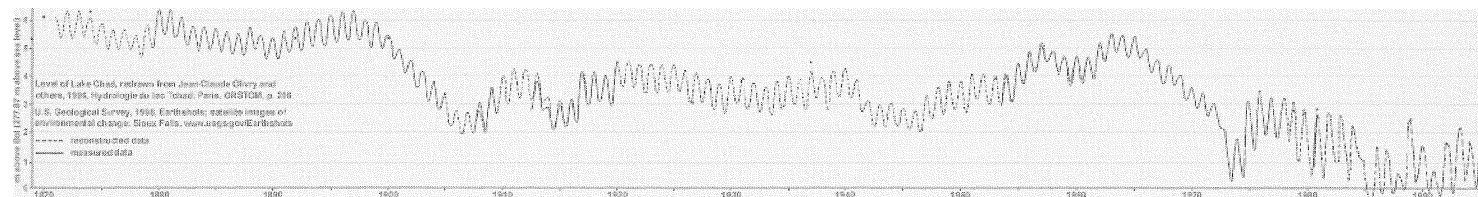
- ・天然の有機高分子フミン酸を含み、酸性である。砂漠はアルカリ性土壌で植物が育ちにくく、これが中和剤として働く。
- ・保水性があるので、植物の生育に必要な水分を保持し、同時に地下への無用な水の浸透を防ぐ作用がある。これは、蒸発による水の損失を減らすとともに塩害を抑制することにもなる。
- ・フミン酸やその他の成分には極基性が多量にあり、肥料成分を吸着保持する性質がある。
- ・地球上におよそ500億トン存在し、ほとんどが利用されていない。



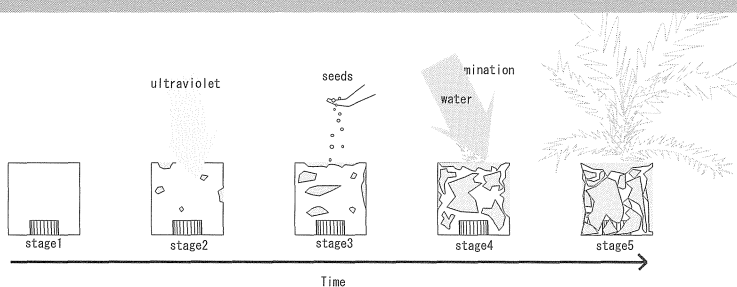
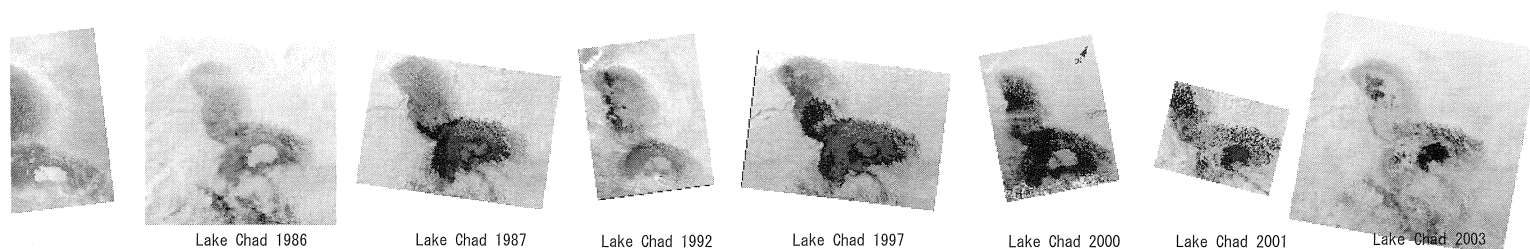
4、時間経過とともに変化する村

図のように継続的に建設が行われ、漸進していくと同時に後ろは腐っていく。定期間後には、その外壁だけが朽ちて、何もなかったかのごとく建築が消滅するのである。それどころか、土壌改善の働きがうまく運んだとすると、その軌跡には緑が繁殖し、家畜を養うことが可能になり、さらにうまく運べば、農耕も可能かも知れない。





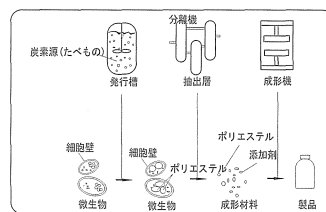
チャド湖の水位



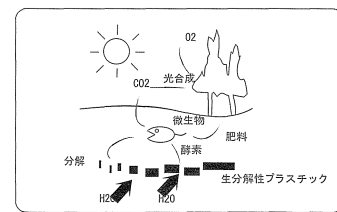
分解のメカニズム

- 1段階・・・プラスチック中のデンプンに菌などの微生物が接触し、菌体から分泌される酵素により分解され消化される。残ったプラスチックは穴が開いた状態になる。
- 2段階・・・含まれている自動酸化剤が土中または水中の金属塩と反応して過酸化物を生成し、これがプラスチックを構成する分子の鎖を切断する。
- 3段階・・・ポリマーは分子鎖の切断によってオリゴマーと呼ばれる比較的重合度の低いポリマーになりやがてさらに低分子量の物質となる。
(ポリエチレンのような直鎖状炭化水素は分子量が500以下になるとカビの生成を支持する。)

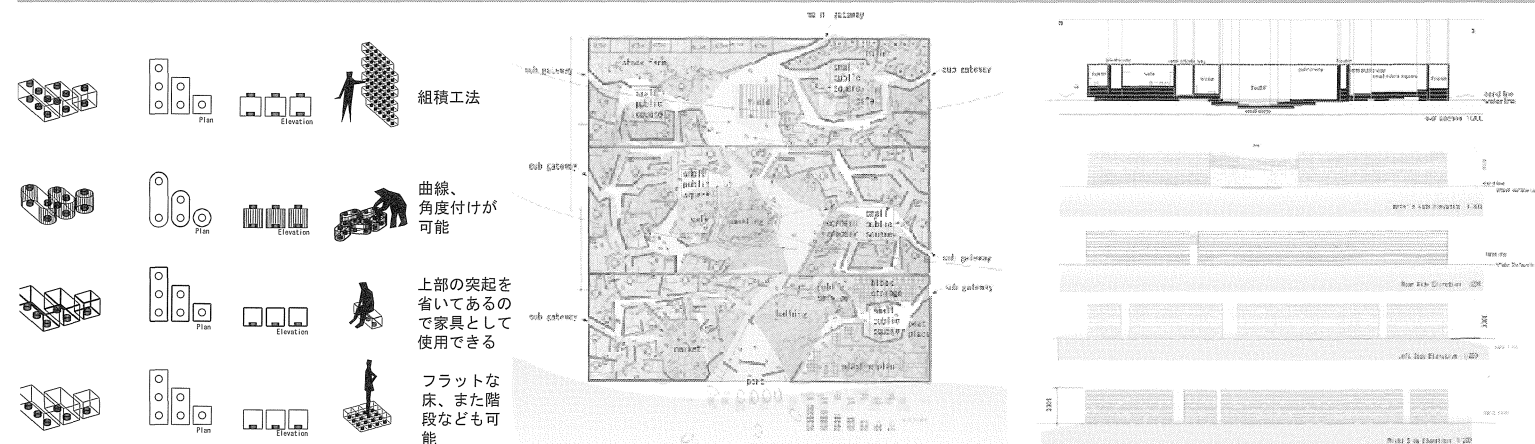
- stage1 接触環境にさえ注意すれば貯蔵中に分解はじまることは防げる
- stage2 紫外線による劣化により、主に上部から分解が始まる
- stage3 表面の劣化の進み具合により種まきをする。食用などのためにナツメヤシ等が考えられる
- stage4 幼木の期間は当然灌漑が必要だがビートによってその量は少なく済むと考えられる。また、プラスチックが中期的に土壌の流出を防止する
- stage5 プラスチック分解後もビートがアルカリ性土壌を土壌を中和し、フミン酸が保水剤として機能し、土壌を改善し続ける



バイオプラントモデル



分解＝炭素循環モデル





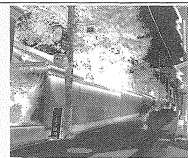
京都に点在する寺社の緑地のうち、例として
祇園を取り上げる。

その中でも特徴的な三つの敷地を計画し、そ
れにより、その他の敷地における計画の可能
性を示す。

また、三つの敷地において、同じ形態操作、
素材を用いることにより、三つの敷地をリンク
させ、そこを訪れた人にとってその緑地が寺社
単体の緑地ではなく都市の緑地として意識され
ることを意図した。

an aerial photograph

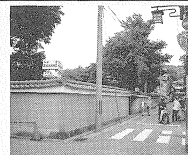
□site1：弥栄会館



□program：休憩所

敷地は弥栄会館前の壁と物置小屋、細長い敷地の形状
から、道行く人がふと休める休憩所を計画した。
壁の隙間から緑の風が吹いたり匂いがする場所で一体、
そんな緑との関わり方。

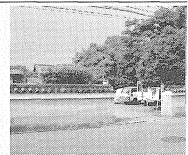
□site2：正伝永源院



□program：ギャラリー

永源院前の駐輪場にギャラリーを計画。ここでは壁の
間は人が通れるほどのスケールになる。
壁の角度、人の立つ場所により緑と作品だけの場所、
市と緑が感じられる場所になったり、人が動くことに
り緑地との関係が変わってゆく。

□site3:建仁寺 禅居庵



□program：小劇場

この敷地では奥行きがあることから小さな舞台を計画
する。
ここでは壁自体の変異性により、その場の空間そのも
が変化する。
ハレの舞台に現れる都市の緑の小劇場。

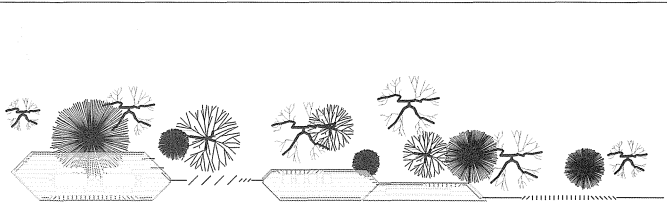
都市と緑と其の境界

◇ concept

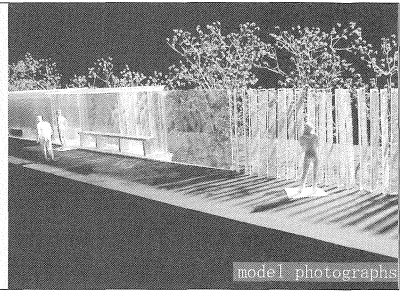
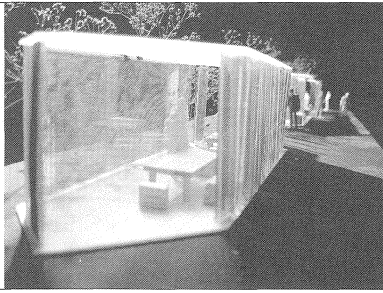
山紫水明 の地、京都に点在する多くの緑地
はほとんどが寺社仏閣のものである。その寺
社仏閣は成り立ちからして（貴族の別荘等…）
都市に対して閉じたものであり、普段私達は
その緑の存在に気づくことは少ない。

そこで現在、壁や駐輪場、駐車場等、都市
と緑を分断するその場所に、人と緑が今とは
違う関わり方のできる場所を提案する

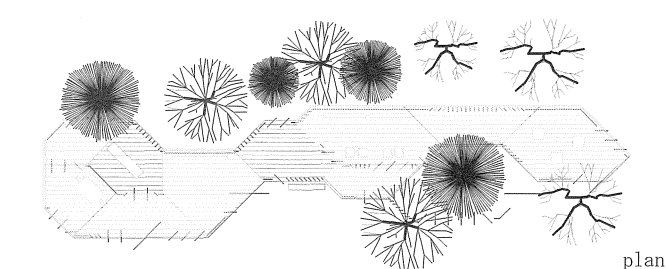




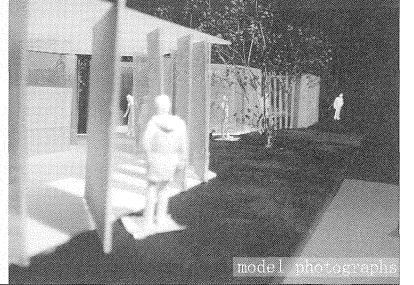
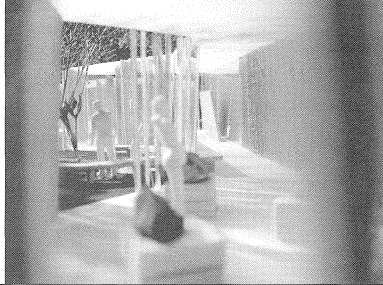
plan



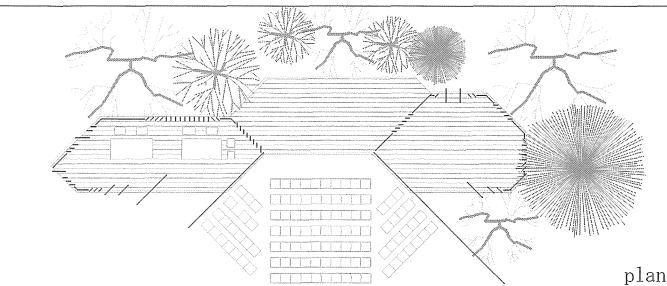
model photographs



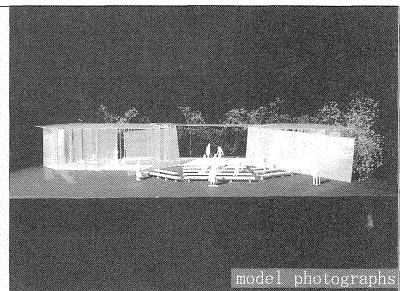
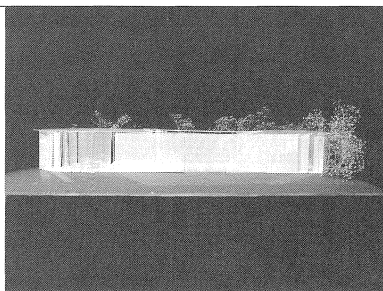
plan



model photographs

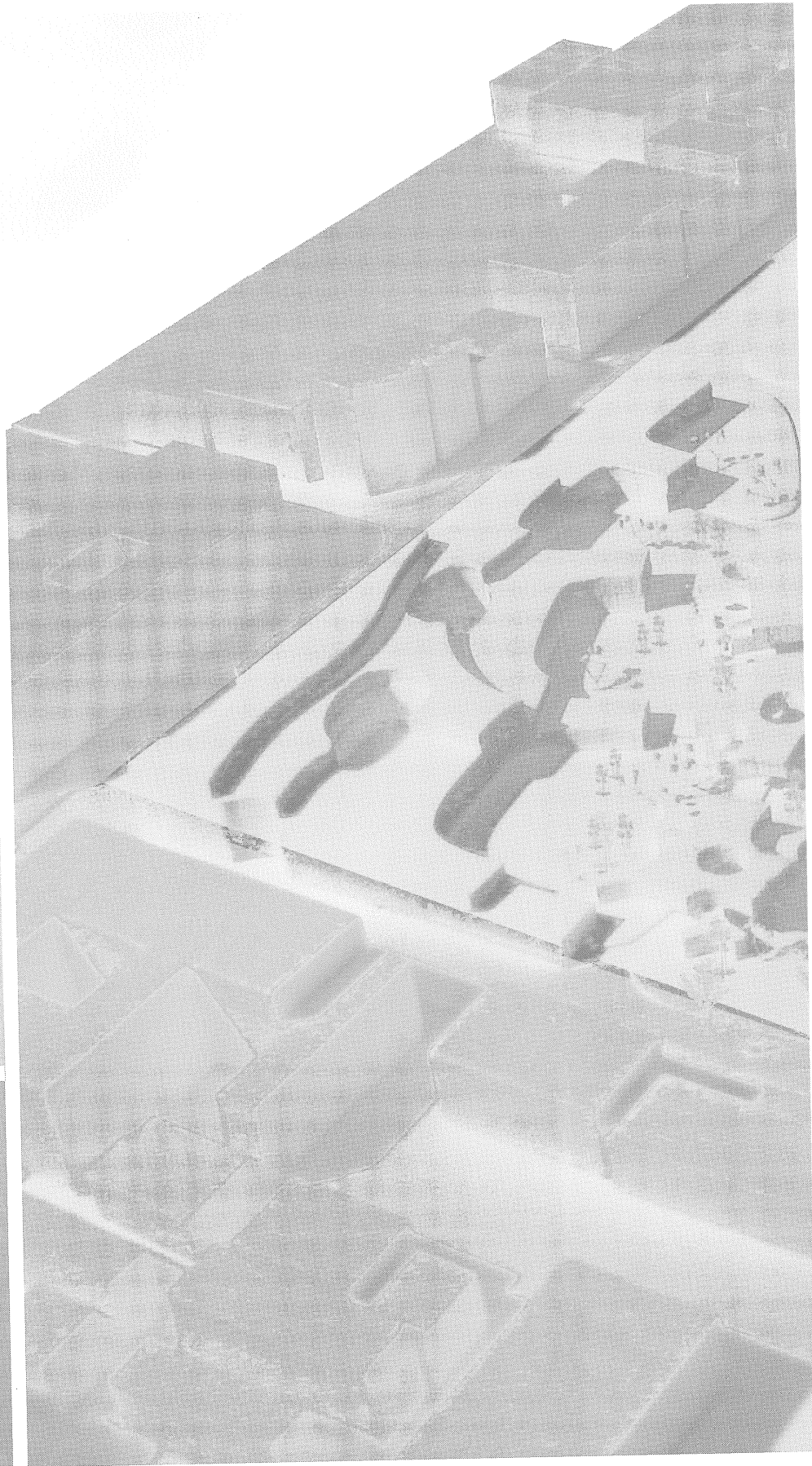
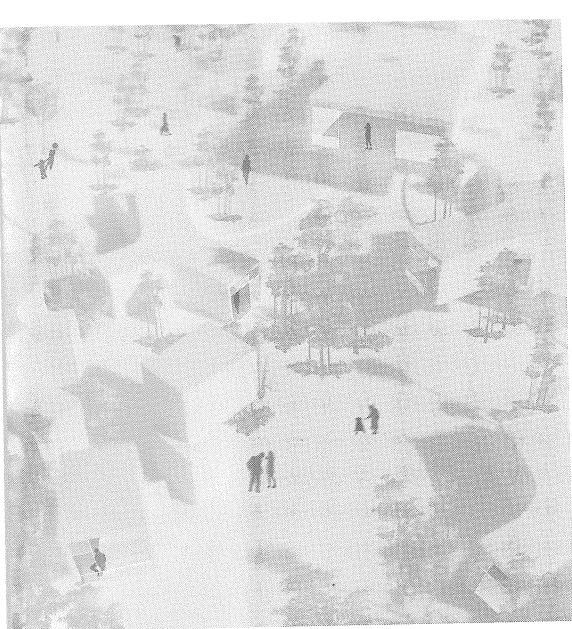


plan

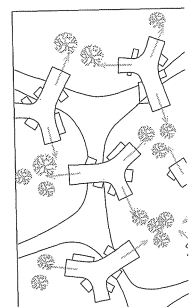
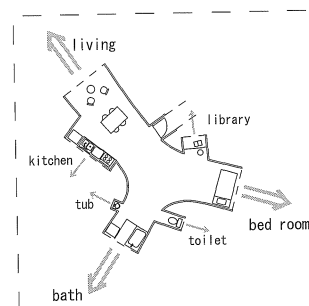
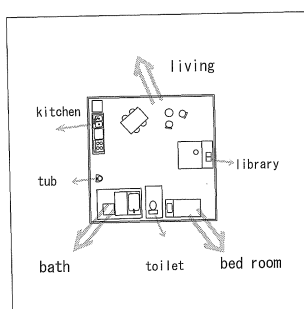


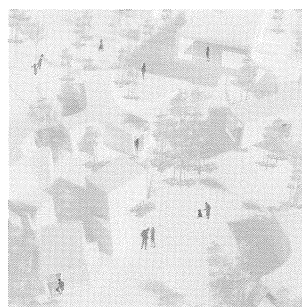
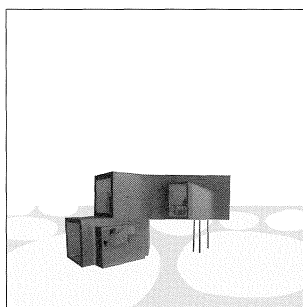
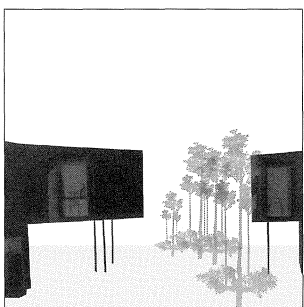
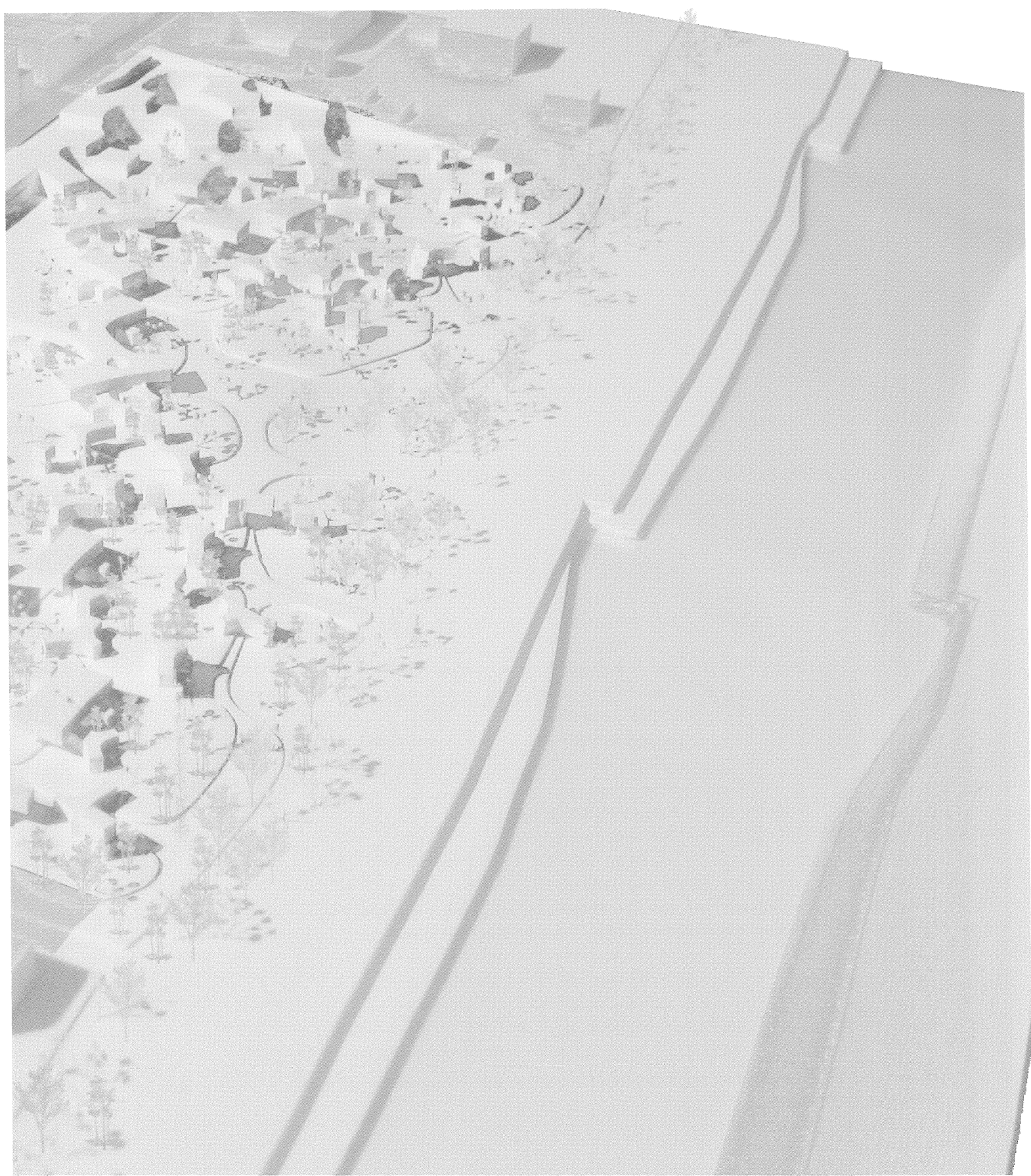
model photographs





ニワノモリ





ポエジーと建築へ竹山スタジオ
言葉は足場である。
ロゴスとは足場である。
そこからエロスが立ち上らねばならない。
あるいはタナトスが解き放たれねばならない。
これらは過剰であり、狂気である。
ただどちらも言葉によって、ロゴスによって、人間が背負い込まされてきた過剰である。
人間は自然でありまた自然からずれている。

過剰に立ち上るもの。
これがポエジーである。

ポエジーはロゴスの足場から身を乗り出し、羽ばたき、落ちる。
足場はポエジーのダンスの出発点だ。
足場がなければ始まらないが、足場はただに始まりに過ぎない。

人間はロゴスの足場を築く。
足場は論理である。
足場のみを辿って満足な人間もいる。
しかし多くの人間は足場からの飛翔を試みる。
あるいは飛翔を憧れる。

組み上げられた足場が解体されたときに、建築というポエジーが姿を現すことだろう。

沈黙と饒舌へ高松スタジオ
時に、人をして沈黙を強いる建築があり、かつ、人をして饒舌へと誘う建築がある。時に、それ自身が沈黙以外のなにものでもない建築があり、かつ、めくるめくほどに饒舌な建築がある。建築の現れ、「様相」若しくは「様態」と記述する以外に無いそのような総体を、「システム」や「体系」で捕捉することなど不可能である。
とはいえ、いや、むしろであるがゆえに、建築を人間と共に在らしめることへと開く営為、即ち「設計」は不毛でも不可能でもない。

時間の中の風景と建築へ宗本スタジオ
誰も逃れることの出来ない平等に覆いかぶさる硬直化した時間のもとで建築を考えると、建築設計では「時間」の問題をあいまいにしてきた。つまり、時間を拘束することで時間のもつ多様性を単一化し、その多様性を忘れ去ったのである。そこでは、建築は部分に分解され、また再構築されるのである。このような増殖を繰り返し、肥大化した建築の風景の典型をニュータウンなどに見ることが出来る。
この課題では、硬直化した時間とは異なる位相をもつ「時間」、たとえば「風化」「うつろい」「仮設」「不可視」など時間の様々な様相をキーワードに、場所や対象を自由に設定して、風景と建築を問い直す。

都市と建築へ門内スタジオ
21世紀を迎えて、大量生産・大量消費を基調としたデザインが行き詰まり、環境や社会の制約条件などを考慮して、幅広い要求を質的に満足するデザインへの転換が求められている。ここでは、デザインを「人間と環境との関係に変化をもたらす」営みとして理解し、個々の人工物のデザインにとどまらず、人工物相互の関係や人工物と環境・人間との関係に配慮することにより、豊かな環境・社会システムをデザインすることが求められている。
都市の中の建築は、他の人工物や人間・環境とのネットワークを形成する結節点として存在する。このスタジオでは、「都市と建築」のダイナミックな関係に焦点を結び、京都という都市をフィールドとして、ミクロな建築をデザインすることによって、マクロな都市をデザインする可能性を探索し、「都市空間に魅力的な場所と風景を創発する新しいタイプの建築(の集合)」のデザインを探索する。